

令和元年6月25日現在

機関番号：32613

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K06402

研究課題名(和文)近世近代ヨーロッパにおける中心と周縁の交流の場としての建築・インテリア創造

研究課題名(英文)Creation of architectural and interior design as a result of exchanges of cultural centre and periphery in the Modern Europe

研究代表者

中島 智章 (NAKASHIMA, Tomoaki)

工学院大学・建築学部(公私立大学の部局等)・准教授

研究者番号：80348862

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：主たる研究目的3点のうち、1点目については、ルイ15世治世下のフランス新古典主義建築とロココ様式のインテリア、プロダクトに注目したが、相異なる傾向のようにみえてじつはそうではないといえる共通の背景を浮き彫りにできつつある。中央と周縁の交流の中でどのように建築・インテリアが創造されていったのかを明らかにする点については、古市公威研究、チェコ、オーストリア、ハンガリーの近代建築史研究などの観点からその諸相を明らかにした。3点目については、アルヴァ・アアルト研究、ジョエ・コロンボ研究、トーネット社研究などを通じて、建築におけるモダン・ムーブメント全体の再読へつなげる視座を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インテリアを「文化資源」ととらえようとするなら、それらに対する史的考察は不可避だが主要な視点ではない。ゆえにインテリアに対する史的考察は本研究の独創点といえる。また、研究分担者として、プロダクト・デザイナーとして活躍し、近年は北欧近代建築史で成果を上げている鈴木敏彦を迎え、インテリアやプロダクトのデザインを包含する広がりの中で近世近代ヨーロッパにおける建築とインテリアをとらえられた。北欧近代建築史については、フランスやイタリアといった中心に偏っていた近世近代ヨーロッパの建築史に周縁たる北欧諸国の重要な建築・インテリア群の諸展開を統合することが可能になった点も成果として挙げるができる。

研究成果の概要(英文)：Among the three research purposes, for the first point, we focused on Neo Classical Architecture and Rococo style interiors and products in France under the reign of Louis XV, we are highlighting a common background of these "different tendencies". In terms of clarifying how architecture and interior were created in the exchanges of cultural "centre" and "periphery", various aspects were clarified from the viewpoint of our researches on FURUICHI Koi and history of Modern Architecture in the Czech, Austria and Hungary. As for the third point, we could get a view that could lead to a revising of the modern movement in architecture through our research on Alvar Aalto, Joe Colombo and Thonet Company.

研究分野：西洋建築史

キーワード：ヴェルサイユ 古市公威 渡辺洪基 ジョエ・コロンボ レヒネル アアルト トーネット

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 16 年度から同 18 年度まで、申請者は若手研究(B)「アンシアン・レジーム期の王権の文化・社会とその文化資源としての建築」を進めてきた。そこでは、人々の様々な活動が常に関わる場ゆえにその共通の記憶を最もよく体現するものとして、建築を人類の生活に不可欠かつ後世に伝えるべき貴重な資源と捉えた。

(2) 一方、平成 19 年度から同 22 年度までの若手研究(B)「アンシアン・レジーム期におけるソフト・パワーとしての王権建築とその様式伝播」では、社会の反映として現れた建築のあり方がひとつの「様式」として結実し、それ自体が絶大な「ソフト・パワー」となって、その様式を生んだ社会とは異なる性質を持つ社会に根付いていくという面も重要であることを明らかにした。

(3) 平成 20 年度から同 23 年度までの基盤研究(A)「都市インフラストラクチャーの史的比較研究」では研究分担者として参加し、オランダや南仏の諸都市を対象とする研究活動の一部を担当して、建築レベルを大きく上回る規模のハードウェアへの幅広い視点や知見を得た。

(4) その後、平成 22 年度から同 26 年度まで、基盤研究(C)「近世ヨーロッパにおける王権と地域勢力の角逐の場としての都市・国土インフラの整備」では、ハードウェアの成立には様々な立場の人々と思惑が関わっていること、ハードウェアにもソフトウェアとしての面があり、それが他の文化や社会へも影響を与えることがあることを前提として、研究対象を単体の建築から国土・都市インフラに拡大し、絶対王政を経て中央集権的な国民国家が姿を現してきた近世ヨーロッパの姿をインフラという視点から明らかにした。

(5) これらを受けて、平成 27 年度から平成 30 年度まで実施した本研究課題、基盤研究(C)「近世近代ヨーロッパにおける中心と周縁の交流の場としての建築・インテリア創造」では、同様のことを次の二つの方向に拡張した。すなわち、1)インフラというマクロな観点からインテリアというミクロな観点への転換、および、2)近世の絶対王政の時代だけでなく近代の市民社会の時代への拡大である。基盤研究(C)「近世ヨーロッパにおける王権と地域勢力の角逐の場としての都市・国土インフラの整備」で示したような近世近代ヨーロッパの姿を建築とインテリアの関係、および、「中心」と「周縁」の交流という視点から明らかにすることを試みた。

2. 研究の目的

(1) 本研究はヨーロッパの近世・近代、すなわち、15 世紀から 20 世紀までの「建築」と「インテリア」(調度品も含む)を対象とし、これらが「中央」(本研究ではヨーロッパにおける政治・経済・軍事・文化の中心となる国・地域のことをこのように呼ぶ)と「周縁」の交流のなかで、それぞれがどのように独自の展開のなかで創造されたのかという観点から、「動かすことのできない」ハードウェアとしての建築と「動かすことのできる」ハードウェアとしてのインテリアの関係、そして、これら 2 種のハードウェアとソフトウェアとしての社会や制度の関連性を明らかにしていくことを目的とする。本研究の成果は、21 世紀を迎えて先進諸国が抱える地方の衰退の問題に対しても、その創造の力をどのように涵養していくのかについて、有用な知見をもたらすものとする。

(2) 具体的には、1)17 世紀後半から 18 世紀におけるヴェルサイユ宮殿を舞台とした各国芸術家の動向、とりわけ、建築よりもインテリアに傾倒したスウェーデン建築家の活動、2)18 世紀における新古典主義建築とロココ様式インテリアの同時展開という二重性、3)歴史主義の諸様式(新古典主義、ネオ・ゴシック、ネオ・ルネサンスなど)の日本を含む全世界への展開における建築とインテリアの伝播の二重性、4)モダン・ムーヴメントの展開における仏独中心史観の脱却、および、北欧、とりわけそのインテリアの位置付けの再読といったテーマを取り上げた。

3. 研究の方法

(1) 本研究では以下のように主要研究テーマ 2 点とその統合テーマ、および、いくつかのサブテーマを配する。これらのテーマの共通点は、「建築」と「インテリア」(天井装飾や壁面装飾だけでなく調度品、演劇・スペクタクルの舞台装飾なども含む)の関係を取り扱っていることと「中央」と「周縁」の交流に焦点をあてようとしていることである。ここで前提となるのは、筆者が実施した若手研究(B)2 課題で獲得した二つの視座、すなわち、1)あるハードウェアの創造は当時の様々な立場の人々と思惑が背景となっているその時代の「文化資源」であるが、一方では、2)ハードウェアにもソフトウェアとしての側面があって、それ自身がソフト・パワーとなって、それが創造された社会・文化とは異なる他の社会・文化へも影響を与えることがあるという視点である。

1) 建築とインテリアのデザイン展開の二重性(二重性のテーマ)

- a) 16 世紀フランスの古典主義的な建築・建築論の伝播とマニエリスムのインテリアの二重性
- b) 18 世紀における新古典主義建築とロココ様式インテリアの同時展開という二重性
- 2) 「中心」と「周縁」の交流のなかで涵養された建築・インテリア創造(交流のテーマ)

- a) 17 世紀後半から 18 世紀におけるヴェルサイユ宮殿を舞台とした各国芸術家の動向
- b) 歴史主義の諸様式の日本を含む全世界への展開
- 3) 上記 2 視点の統合テーマ
モダン・ムーヴメントの展開における仏独中心史観の脱却と北欧建築・インテリアの再読

(2) 1)では、同時代の建築様式とインテリア様式の齟齬に注目し、それぞれの展開の背後にある社会・経済・軍事・文化上の諸展開、それを建設・制作し維持していくための技術、関わった人物を明らかにしながらも、何故に建築とインテリアが相異なる傾向を見せたのかを明らかにする。2)では、同時代の「中央」と「周縁」の交流に焦点を当て、そのなかでどのように建築・インテリアが創造されていったのかを明らかにする。2)-a)ではフランスとスウェーデン、2)-b)では帝国主義時代の二大国イギリスとフランスを「中心」と位置付け、ヨーロッパだけでなくわが国も含むアジアへと対象を拡大する。とりわけ、2)-a)は次の 3)に直接連なる重要なテーマである。3)は上記 2 テーマの統合であり、本研究の最重要到達点と位置付けている。北欧諸国を中心に、現地での実測調査、および、史料調査から、通常、ヨーロッパの「周縁」と位置付けられる北欧諸国の建築・インテリアの特徴、その建築家・デザイナー、および、技術者の実際などを浮き彫りにし、現代の建築シーンにも直結しているモダン・ムーヴメント全体の再読へとつなげたい。

(3) このように、本研究は「建築とインテリアのデザイン展開の二重性」、および、「『中心』と『周縁』の交流のなかで涵養された建築・インテリア創造」という二つの主要研究テーマがあり、研究遂行にあたっては、各研究担当者の専門と関心に基づいて、以下のようなテーマ別の研究チームを組み、それぞれ現地における実測調査や史料調査に臨んだ。

- 1)-a)、b) 16 世紀および 18 世紀フランスの建築とインテリア(二重性のテーマ)：中島
- 2)-a) ヴェルサイユ宮殿を舞台とした各国芸術家の動向(交流のテーマ)：中島、鈴木(下線は主導者)
- 2)-b) 歴史主義の諸様式の日本を含む全世界への展開(交流のテーマ)：中島、鈴木
- 3) モダン・ムーヴメントへの北欧建築・インテリアの位置付け(統合テーマ)：中島、鈴木

4. 研究成果

(1) 本研究では、ある社会・文化が生み出したものであると同時に、ある社会・文化に独自の影響を及ぼしていくそれ自体独立した生命を持つソフト・パワーとしての「文化資源」としての建築の範囲を、さらに小規模で建築のなかに包含される小宇宙たるインテリアにも及ぼそうとしたものである。その特色や意義、成果として次の 3 点を挙げる。

(2) まず、インテリアを「文化資源」ととらえようとするなら、それらに対する史的考察は不可避だが、教育上、これらは大学よりも専門学校で実用的に教えられることが多く、少数の例外を除けば、主要な視点ではない。それゆえ、インテリアに対する史的考察は本研究の独創点といえる。

(3) 次に、本研究では研究分担者として、長年にわたりプロダクト・デザイナーとして活躍し、近年は北欧近代建築史において大きな成果を上げている鈴木敏彦氏を迎え、建築デザインだけでなく、インテリアやプロダクトのデザインを包含する広がりの中で近世近代ヨーロッパにおける建築とインテリアをとらえられたことが挙げられる。

(4) また、北欧近代建築史については伊藤大介氏や和田菜穂子氏の重要な個別研究があるが、研究分担者に鈴木氏を迎えることによって、フランスやイタリアといった「中心」に偏っていた近世近代ヨーロッパの建築史に「周縁」たる北欧諸国の重要な建築・インテリア群の諸展開を統合することが可能になった点も成果として挙げることができる。

(5) 研究目的で挙げた 1)の同時代の建築様式とインテリア様式の齟齬に注目し、何故に建築とインテリアが相異なる傾向を見せたのかという点については、18 世紀、とりわけルイ 15 世治世下のフランスにおける新古典主義建築とロココ様式のインテリア、プロダクトに注目したが、「相異なる傾向」のようにみえて、じつはそうではないといえる共通の背景を浮き彫りにできつつある。2)の同時代の「中央」と「周縁」の交流に焦点を当て、そのなかでどのように建築・インテリアが創造されていったのかを明らかにするという点については、主に、古市公威を通じたフランスなどの治水技術の日本への導入という観点、および、チェコ、オーストリア、ハンガリーの近代建築史という観点からその諸相を明らかにした。3)については、フィンランドの建築家アルヴァ・アアルトのルイ・カレ邸現地調査、モダン・ムーヴメント後のイタリア・インテリア・シーンに重要な足跡を残したジョエ・コロソ事務所との共同研究、オーストリアを中心として調度品生産を手がけてきたトーネット社の現地調査などを通じて、建築におけるモダン・ムーヴメント (Modern Movement in Architecture) 全体の再読へとつなげる視座を得ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

- 「ポルドー中近世建築 12 景」, 中島智章, 『日仏工業技術 L' ECHANGE』 64/ 1, 査読無, pp.8-12, 2018.12
「矢部又吉作品の模型製作」, 中島智章, 『知られざるドイツ建築の継承者 - 矢部又吉と佐倉の近代建築』, 佐倉市立美術館, 査読無, pp.81-84, 2018.11
「戦争の間、鏡の間、平和の間の関係の多様性の中にみられる ヴェルサイユ宮殿のグランド・デザインへの指向」, 中島智章, 『日本建築学会計画系論文集』 第 83 巻第 749 号, 査読有, pp.1337-1346, 2018.7
「ドブロヴニクの都市築城」, 中島智章, 『地中海学会月報』 406, 査読無, p1, p.8, 2018.1
「西洋建築史におけるガラスと鏡」, 中島智章, 『日事連』 55/647, 査読無, pp.4-9, 2017.9

[学会発表](計14件)

- “Outlook of studies on the Japanese “fortifications bastionnees”:Comparison between Japanese and European cases”, Tomoaki NAKASHIMA, ICOFORT International Conference in Hikone, 査読有, 2018.10
「古市公威によるイタリアのインフラ視察記 その1 都市ローマのインフラ記述」, 中島智章, 日本建築学会『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』 2018, 査読無, pp.863-864, 2018.9
「ヨーロッパにおける坑道掘削技術の一側面 中近世ワロニー地域の坑道排水技術の発展」, 中島智章, テロワール研究会第1回公開シンポジウム「テロワールの空間」, 招待講演, 2018.2
「宗教改革期の教会建築」, 中島智章, 上智大学キリスト教文化研究所, カトリック東京大司教区, 招待講演, 2017.11
「近世ヨーロッパの貴族住宅平面 フランスのルネサンス・バロック建築を中心に」, 中島智章, 近代建築史研究会, 招待講演, 2017.10
「古市公威によるフランス・プロヴァンス地方のインフラ視察記 その2 言及された4箇所の吊り橋の概要・現況」, 中島智章, 日本建築学会『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』 2017, 査読無, pp.899-900, 2017.9
「フィールドとしての「西洋」を問う-建築史・都市史研究が拓く未来」主旨説明」, 中島智章, 日本建築学会研究協議会, 招待講演, 2017.9
「歴史的建造物の記録方法としての写真術」, 中島智章, Architectural Photography Lecture at Seoul National University of Science and Technology, 招待講演, 2017.5
基調講演「世界の歴史的建築とくらし ルーヴルとヴェルサイユの古今」, 中島智章, 日本建築学会山形支所事業 2016「歴史的建築のあるくらし」, 招待講演, 2016
「古市公威によるフランス・プロヴァンス地方のインフラ視察記」, 中島智章, 日本建築学会『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』 2016, 査読無, pp.749-750, 2016.8
地中海トークン「ニュータウンの古今東西」 低ラングドックの丘上都市の諸相」, 中島智章, 地中海学会年次大会, 2016.6
「建築プロダクトデザイン/家具と建築を行き来するかたち」, 鈴木敏彦, TAIWAN DESIGN EXPO 2015, 招待講演, 2015.11
「1642年ベルピニャン攻囲戦におけるフランス軍攻囲陣」, 中島智章, 日本建築学会『学術講演梗概集 F-2 建築歴史・意匠』 2015, 査読無, pp.159-160, 2015.9

[図書](計13件)

- 『<<悪魔のロベール>>とパリ・オペラ座 19世紀グランド・オペラ研究』, 澤田肇, 佐藤朋之, 黒木朋興, 安田智子, 岡田安樹浩, 中島智章他, 上智大学出版, 2019
『宗教改革期の芸術世界』, 中島智章, 児嶋由枝, 磯山雅, 竹内修一, リトン, 2018
『NICHE 05 イタリア建築探訪!』, 鈴木敏彦, 中島智章, NICHE 出版会他, 丸善出版, 2018
『NICHE 04 ドイツ建築探訪!』, 鈴木敏彦, 中島智章, NICHE 出版会他, 丸善出版, 2017
『建築 未来への遺産』, 鈴木博之(著), 伊藤毅(編), 中島智章他(解題), 東京大学出版会, 2017
『北欧文化事典』, 鈴木敏彦他, 丸善出版, 2017
『世界一の豪華建築バロック』, 中島智章, エクスナレッジ, 2017
『NICHE 03 特集フランス建築探訪!』, 鈴木敏彦, 中島智章, NICHE 出版会他, 丸善出版, 2016
『プロセスでわかる住宅の設計・施工』, 鈴木敏彦, 半田雅俊, 彰国社, 2016
『インテリアの百貨辞典』, 鈴木敏彦他, 丸善出版, 2016
『図説イングランドの教会堂』, トレヴァー・ヨーク著, 中島智章訳, マール社, 2015
『世界で一番美しい天井装飾』, 中島智章, エクスナレッジ, 2015
『建築を保存する本 01 工学院大学八王子図書館/武藤章』, 鈴木敏彦(編集・装丁), Opa Press, 2015

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：鈴木敏彦

ローマ字氏名：SUZUKI, Toshihiko

所属研究機関名：工学院大学

部局名：建築学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：60316453

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。